

「トビーキッズのたんけん隊」事業報告

「トビーキッズのたんけん隊」について

目的

- 若狭湾の自然で思い切り遊ぶことを通して、自然と親しむ心と体を育む。
- 自然の中で様々なチャレンジを通して、意欲を高め、自信をつける。
- 四季を通じた体験を通して、地域の自然の豊かさ、面白さに気づく。

事業の経緯

昨年度まで・・・
「キッズ海のたんけんたい」として、
スノーケリングを中心とした1泊2日の事業

- 5年継続している人気のある事業で申込者が多い
- 利用者には提供していない低学年でも海の体験ができる
- 夏のみの実施、他の季節や山での体験ができない
- スノーケリング活動のための事業で、広がりが少ない

本年度から・・・
「トビーキッズのたんけん隊」として、
四季を通じた様々な体験ができる年間4回、
合計5泊9日の事業

<リニューアルした点>

- ・定員を20名→30名
- ・春夏秋冬、四季を通じた自然体験ができる
- ・若狭湾という大自然が舞台（積極的に地域出る）
- ・自然や生き物とふれあう機会を増やす

事業の全体像（年間4回実施）



1年間の見通しを持って、事業を計画し、低年齢期から自然や生き物にふれ、自然の中で遊ぶこと、自然の中で過ごすことが好きになってもらえるように、その季節でできる体験を検討し、各回の内容を決定した。プログラム作成に当たっては、以下の4つの視点を持って臨むこととした。

・ストーリー性を持った展開

各回が独立して展開されるのではなく、次の回のイメージを持たせたり、どんなことをしてみたいのか考えさせたりと、つながるような工夫を取り入れていきたい。

また、野外炊飯を毎回取り入れるようにしたり、できる限り宿泊棟外で宿泊をする機会を設けたりすることで、繰り返し体験することができるようにし、失敗する体験やできるようなる体験の機会をつくりたい。

・四季を通した様々な体験

これまでは、夏のみの実施でスノーケリング活動を中心とした内容であった。もちろん、本事業においても、夏はスノーケリングを行うこととしたいと考えているが、年間4回、春夏秋冬を通した事業とすることで、季節に合わせて様々な体験をすることができるような事業としたい。また、宿泊棟以外での宿泊（ログハウス泊やテント泊）も積極的に取り入れ、自然の中で過ごす時間をできるだけ多くするようにしたい。

・新たな連携や新たなフィールドでの活動

若狭湾の地域資源を生かした活動を行うために、これまで連携していなかった団体や活動をしたことがないフィールドにも積極的に出向き、そこでできる体験を検討していきたい。そのノウハウをまとめ、当施設を利用する学校や青少年教育団体や他の事業でも活用できるような仕組みをつくりたい。

・低年齢期の子どもたちの特性

親元を離れて初めて泊まる子どもたちも多いことが予想されるため、ボランティアスタッフや職員が身の回りのものの整理・整頓や着替え、洗面、入浴が一人でできるためのサポートをしたり、移動にも時間がかかることから、時間にゆとりある柔軟なプログラムを心掛けたりと、まずは、1ページ目の図にあるように、第1回や1年目は、生活場면을重視して取り組んでいきたい。年間を通して子どもたちも体験を重ね、また、施設としても事業のノウハウを蓄積することで、体験場面での広がりが期待できるようになると予想している。

体験を通して、感じたことや発見したことを、表現することは、体験を自分自身の中に落とし込むために有効な手段であると考え、低学年の子どもたちは、言葉に表現することはまだ、難しい面もあると考え、毎回、絵に表現してもらおうこととしたい。

期待する子どもや保護者からの感想

<子ども>

- ・大変なこともあったけど、楽しかった。
- ・たくさんの友達ができた。
- ・これからもいろいろなことをしてみたい。
- ・海や山が好きになった。

<保護者>

- ・自分から進んで行動できるようになった。
- ・いろいろなことに興味を持つようになった。
- ・外で遊ぶことが今までよりも好きになった。
- ・親子でよく話をするようになった。

参加した子どもたちが、まずは様々な体験や仲間との活動を楽しんでもらい、自然が好きになって欲しい。また、保護者からは、子どもたちが自分のことは自分でできるようになるなど自立した姿が見られるようになったと感じて欲しい。そして、体験したことを親子で話したりする中で、親子でのコミュニケーションや親子での体験が増えることも願っている。各回や4回を通してのアンケート調査や感想から、期待するようなことがあるかどうか、今

後、見ていきたい。

参加者

主な参加者募集の手段としては、学校を通して、当施設の近隣地区である福井県嶺南地域（敦賀市、美浜町、若狭町、小浜市、おおい町、高浜町）と滋賀県高島市、京都府舞鶴市の小学1年～3年の児童全員に、チラシを配布してもらった。それに加え、昨年度、当施設を家族・グループ等で利用していただいた方やフェスティバル等の施設開放事業に参加いただいた方に向けて、本年度の事業全体の案内を送る際に、本事業のチラシも同封した。

応募者 104名 / 参加決定者 35名

昨年度まで7月に1泊2日で開催していたスノーケリングを中心とした小学1年～3年を対象とした教育事業「キッズ海のたんけんたい」においても、定員以上の申し込みをいただいております。本事業においても、大勢の方のお申し込みをいただいていた。

参加者数の学年応募者の学年、性別の割合に合わせ、参加者の学年、性別ごとの人数を決めて、抽選を行った。定員を超える募集があったために、定員を30名から35名へと増やすこととした。

表1. 応募者数表

	男	女	合計
小学1年	13	12	25
小学2年	29	15	44
小学3年	24	11	35
合計	66	38	104

表2. 参加者数

	男	女	合計
小学1年	4	4	8
小学2年	10	5	15
小学3年	8	4	12
合計	22	13	35

表3. 各県別の応募者数と参加者数

府県名	応募者数	参加者数
福井県	70	23
滋賀県	15	3
京都府	6	2
大阪府	4	3
岐阜県	3	2
奈良県	2	0
愛知県	2	1
富山県	1	0
兵庫県	1	1
合計	104	35

本事業への参加申込書において、これまでに当施設の教育事業等を利用した経験を探した。その結果、経験がない人が、多いことがわかった。また、経験があると答えた人には、どのような事業に参加をしたのか尋ねたところ、施設開放事業などの親子を対象とした事

業に参加したり、家族で当施設を利用されたりしているとのことであった。それ以外では、本人の参加ではないが、兄や姉が事業に参加していたとの回答もあった。参加経験がない人が今回多く応募していただいております、その多くは、おそらくチラシを見たり、ホームページを見たりしていることと考えられる。チラシの配布先やよりわかりやすいチラシのデザイン、掲載する内容なども、今後検討を重ねていきたいと考えている。

表4. 当施設での事業への参加経験（応募者）

	小学1年生	小学2年生	小学3年生	合計
有	4	8	16	28
無	21	36	19	76
合計	25	44	35	104

また、参加申込書において、子どもだけでの宿泊経験について、ご自宅以外で、保護者の方がおらず、お子様だけで宿泊された経験を教えてくださいと尋ねた。想定していたよりも、子どもだけでの宿泊経験があると答えた人が多かった。経験があると答えた人は、学年が上がると増える傾向にあり、応募者では経験がある人が多かったが、参加者では経験がない人が多くなっていた。特に抽選には考慮しなかったが、子どもだけでの経験のない人が多いことから、生活面の支援にも配慮することが大切であることを再確認した。

表5. 子どもだけでの宿泊経験の有無（応募者）

	小学1年生	小学2年生	小学3年生	合計
有	15	21	26	62
無	10	23	9	42
合計	25	44	35	104

表6. 子どもだけでの宿泊経験の有無（参加者）

	小学1年生	小学2年生	小学3年生	合計
有	3	5	8	16
無	5	10	4	19
合計	8	15	12	35

<第1回 春のたんけんの報告>

期 日：平成28年5月14日（土）～15日（日） 1泊2日

参加者：31名（募集定員 30名）

	男	女	合計
小学1年	4	3	7
小学2年	8	5	13
小学3年	7	4	11
合計	19	12	31

欠席：4名（小1女、小2男2名、小3男1名）

ボランティアスタッフ：男性 6名・女性 4名 合計10名

日程

5月14日 （土）	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
					受付	はじまりのつどい	仲間作りタイム	昼食		春のたんけん①	「海のいきもの探し」			野外炊飯に挑戦！		春のたんけん②	「夜のいきもの探し」
5月15日 （日）	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15							
	起床	朝のつどい	朝食・掃除	移動	春のたんけん③	「山のいきもの探し」		昼食	たんけんのまとめ	「春の絵を描こう」	「なつのけいかく」	おわりのつどい					

企画のポイント

年間を通して、自然の中で思い切り遊んだり、季節を感じたりしてもらいたいと考えている。当施設の特徴は、目の前に広がる若狭湾、海である。春から夏にかけては、この海を中心としたフィールドでの活動を実施することとした。第1回を行う5月は、まだ水温が低く、海に入るのは難しい季節ではあるが、海の生き物は多く見つけることができる時期である。そこで、海の生き物探しを中心とした活動を実施することとした。

子どもたちが生き物に興味を持ってもらうためには、海の生き物の名前や特徴、生態などを詳しく教えてもらうことがよいと考えた。そこで当施設の運営委員も依頼しているあわしまマリンパーク飼育顧問白井芳弘氏に講師を依頼した。また、白井氏が講師をされている名古屋コミュニケーションアート専門学校でイルカトレーナーや水族館職員を目指す学生にもボランティアを依頼し、子どもたちの支援をお願いした。

また、初めてキャンプに参加する子どもたちが多くことから、キャンプの楽しさも味わってもらいたいと考えた。そこで、本館の宿泊室での宿泊ではなく、キャンプ場にあるログハウスでの宿泊することとした。また、各回ともできる限り野外炊飯を1回は取り入れたいと考えている。徐々に野外炊飯ができるようになればいいと考えており、第1回は、特に、火を付けること、お湯を沸かすこと、簡単な調理（みそ汁作り）を計画した。

さらに、各回の最後には、子どもたちに印象に残ったことを絵に描いてもらうようにした。低学年の子ども、特に1年生は、思っていることや伝えたいことを文字で表現することはまだ難しいと考えた。そこで、各自にクレヨンを配布し、思い思いに絵を描いてもらうようにした。

運営のポイント

参加者を7名ずつに分け、5つの班を設け、学年や性別が均等に分かれるようにした。第1回から第4回までのその班は変えないようにし、回を重ねるごとに班の交流が深まることを期待した。また、各班にボランティアの学生を2名～3名配置するようにし、子どもたちの活動の支援をしてもらうようにした。

低学年の子どもたちが、落ち着いて話を聞いたり、活動をできるような環境を整えたいと考えた。子どもたちがグループでまとまることができ、自分の居場所がわかることで、安心感が得られるように、机も椅子も普段から置いていないオリエンテーション室に、各グループごとに、畳を敷き、座卓を置き、座ることができる場を作った。

安全管理のポイント

海のいきもの探しについては、海と触れる機会が増えることから、海に詳しい名古屋コミュニケーションアート専門学校の学生と当施設のボランティアとがペアを組んで活動の支援にあたってもらうこととした。参加者は、名古屋コミュニケーションアート専門学校の学生には、海の生き物についての知識や海の面白さについてを教えてもらう役割を担ってもらい、当施設のボランティアには、当施設での生活の仕方や子どもたちをつなぐ役割を担ってもらい、本事業の運営が円滑にいくように関わってもらいたいことを伝えた。職員は、海での活動では、子どもたちの活動エリアを取り囲むように配置し、安全管理を中心に見るようにした。

また、いきものを探すだけでなく、探したいきものをスケッチする活動を取り入れた。いきものをじっくりと見ることは、ふだんの生活の中ではあまりないことだろう。いきものの特徴的な部分を講師の白井先生から教えてもらい、自分の目で見て、自分の

今回初めて親元を離れて泊まる参加者もいることから、ホームシックの心配があった。それを乗り越えることも一つの体験である。しかしながら、泊まることへの不安をできる限り軽減できないかと考えた。いきなりテント泊をすることは、ハードルが高いだろう。そこで、参加者全員で、一緒に一つのログハウスに、寝袋で泊まるようにすることで、楽しい雰囲気のまま過ごすことができるのではないかと考え取り入れた。

実際の様子

<1日目>



開会式「少し緊張気味の子どもたち」



アイスブレイキング「笑顔がみえてきた」



海のいきもの探し「あ！何かいた！」



生き物スケッチ「アメフラシ、どんなかな」

1日目のふりかえりの絵

子どもたちがスケッチした絵を見てみると、アメフラシの特徴をきちんと捉えて書いている絵が多かった。スケッチをしている様子を見ていても、水槽の中をじっと見つめて書いていた。生き物の口や足など、体の部位を白井先生から教えてもらったからだろう。ただ漠然と生き物をスケッチするだけではなく、生き物について詳しく知ったうえで描くことで、より詳細な絵を描けるようになるだろう。





野外炊飯「火を付けるの、できた！」



野外炊飯「外で食べるとおいしいね」



夜光虫を見よう「こんなカタチなんだ！」



ログハウス泊「初めて寝袋で寝るよ」

<2日目>



朝のつどい「朝早く起きられたよ」



朝食「自分で準備ができたよ」



森のいきもの探し「見つけれられるかな」



森のいきもの探し「歩いて仲良くなれた！」



ふりかえり 感想をしおりに書き、思い出の絵を描こう

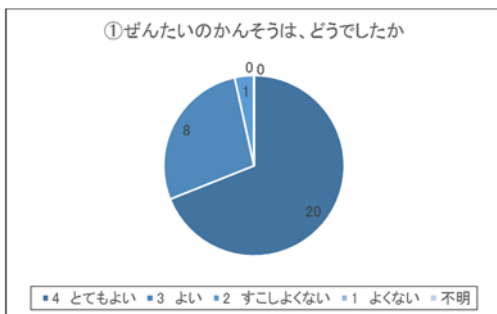
2日目のふりかえりの絵

子どもたちの絵からは、生き物の様子や野外調理の様子がよく描かれていた。自分たちが見つけた生き物を描いている子が多かった。また、野外調理の様子やログハウスで泊まったことを描いている子も多かった。初めて親元を離れて生活した子どもたちにとって、こうした生活の場面も印象に残る体験となることだろう。2日間とも絵を描いてもらったが、特に1年生は絵を描いて表現することがまだおぼつかない子もいたが、思い思いに絵を描いている様子からは、体験したことを思い出し、何かしら一生けんめい形にしていこうと前向きに取り組む様子がみられた。こうした時間を次回以降も取れるように計画していく。



事業アンケート

(1) 参加してのかんそうを教えてください。

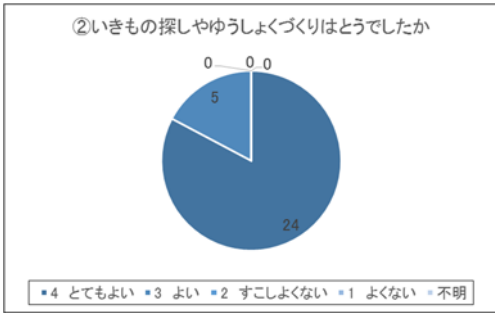


○ 友だちができてよかった

○ とても楽しかった。また行きたい。

○ 魚のことがいっぱいわかってためになった。

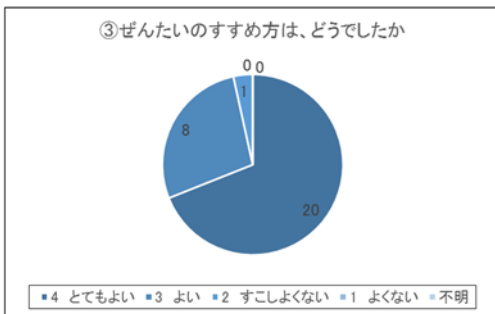
初めて出会う仲間とも打ち解けることができ、楽しく活動ができたとの声が多かった。また、メインの活動であるいきもの探しは、講師の白井先生をはじめ、ボランティアの学生からも名前や生態を教えてもらい、知る楽しさを感じられた。



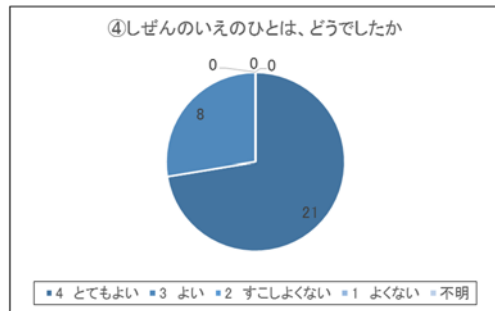
○めずらしい生き物を見ることができ、良かった。
○まきやマッチをもってきて、マッチではじめて火をつけたのでときどきしました。

○みんなとやって楽しかったです。

生き物探しも、夕食作りもよかったと思う参加者がほとんどだった。ゆうしょくづくりではみそ汁を作ったが、仲間とまきに火をつけ、調理し、できたみそ汁をおいしく食べている姿が見られた。



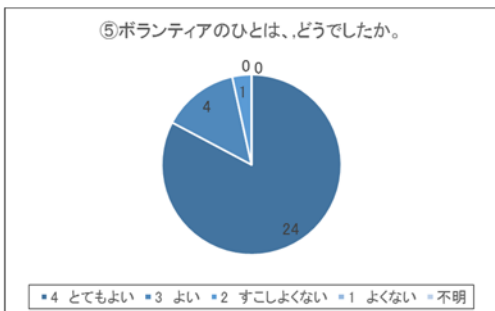
特に自由記述はなかったが、すこしよくないと答えた参加者もいた参加者に、次の集合時間や活動の開始時間を伝えたのだが、遅れがちになってしまったり、準備物を分かりやすく伝えることができていなかったりと課題もあった。



○良い人ばかりで良かった。

○やさしかった。

はじめて親元を離れて過ごす子どもたちが安心できるように、また、参加者が安全に活動できるように時には、きちんと注意しながら、今後も関わっていきたいと考えている。



○やさしくていっしょにあそんでくれてよかった。

○みなさん明るくてすてきでした。

○ボランティアさんがいてくれたから、いつもよりのしめた。

職員と子どもたちの間にいるボランティアの学生の雰囲気もよく、子どもたちも楽しめたようだ。

事業の成果と課題

- 本年度からの新規の事業ではあったが、昨年度までのスノーケリングの事業の認知度が高かったためか、多くの申込があり、低学年の事業に対するニーズが高いことが再確認できた。
- 生き物をつかまえる体験、生き物にふれる体験などは、これまでも実施しているが、今回、白井先生の指導もあり、生き物をスケッチする、生き物の絵を描く体験を取り入れた。アメフラシの絵を描いたが、子どもたちが熱心に生き物を見て、特徴をつかもうとしていた。1年生には少し難しかったかもしれないが、生き物を見る目、自然を見る目を養う上で、有効な手段であると感じた。
- 1日目の夜に1名、ホームシック気味になり、全体から離れて過ごすことがあった。低年齢期の子どもたちということや初めて親元を離れて過ごす子どもたちが多いということで、もっと多くの子どもたちがホームシックになることを予想していたが、ログハウスというひとつ屋根の下で、参加者・スタッフが一緒になって泊まる（もちろん男女で宿泊する場所を分けている）体験が、安心感や楽しさを与えてくれたためか、1名のみであった。
- 説明の仕方や注目のさせ方、話を聞く姿勢など、活動に取り組む前の基本的なルールづくりが十分ではなかった。例えば、話を始める前に子どもたちを注目させるための時間が長くなってしまったり、私語が多かったりする場面が多くみられてしまった。次回以降、低学年の子どもたちが集中して話を聞ける環境づくりやひきつけるための工夫が課題である。また、各班に配置しているリーダーと共通理解を持って臨むことも重要である。話を聞く雰囲気全体を作っていくたい。
- ボランティアのグループリーダーの安全管理や指導に関する面で、いくつか気になる点があった。例えば、山のいきもの探しの際に、山から浜に下りてきたグループがいくつかあったが、子どもたちから目を離して、グループリーダー同士で話をしている場面が見られた。低学年の子どもたちは時に予測不可能な動きをする。常に目を離さないようにじっと見ていることは難しいとしても、誰がどこで何をしているか、目の端で認識をしているように伝え、安全管理に対する意識を高めていきたい。
- 当施設の中で、ふだんはそこまで気をつけていなかった箇所に、思わぬ危険が潜んでいることがわかった。例えば、野外炊飯場の近くにある法面によじ登り始める子どもたちの姿が、高さは2~3メートル程度。垂直ではなく、勾配があり、石が埋められているので、止めさせるほどの危険性はないと考え、スタッフを配置して様子を見た。また、同じく炊飯場にかかる吊り橋。背の低い子どもたちが誤って横のガードロープの間から落ちる危険もあることから、全員で通過するとき以外は、入らないようにした。

4回シリーズの事業ということで、第1回の成果と課題を次回以降につなげることができ、低学年の子どもたちが、充実した体験ができるよう、第2回目以降につなげていきたい。